

昭和二十四年七月二十五日
 昭和二十五年九月十五日
 第三種郵便物認
 行三（毎月一回・十五日発行）

（通第三一五号）

慈

光

第二十七卷

第九号

◎ 63.8.18

近角常音先生を憶う……………花田正夫……………(18)

目 念 仏 詩 抄……………木村無相……………(15)

いのちのよろこび(一)……………高千穂徹乗……………(10)

次 『青蓮華』歌抄(一)……………白井成允……………(7)

真 化 仏 土……………近角常観……………(1)

真 化 仏 土

近 角 常 観

上来、教行信証、往還二種回向、即ち仏陀の恵みが我が心に到った結果、我々が仏陀の境に達せしめていただき、その靈境より再びこの人生にあらわれて来ることをのべたが、これらの種々の事実を貫いてある中心は真実の仏陀である。しかしてまたその真実の仏陀にまで導くための仮の仏陀がある。この真仏化仏のことについてこれより云うところあらん。

一言にして云えば、現今信仰界の有様は種々の実験より種々の仏教を味わうが、その要点はすべての人がこの信仰の中心である仏陀の考えようによって、その信仰もみなそれそれ異って行く。

まず昔で云えば我身は仏であると自身の上に仏陀を認める時は禪宗の如くなり、又その仏陀を理屈的に考えると哲学をもととして立てる宗旨になり易い。その外あるいは仏を社会的に説かんとし、或は心中に理想的に考えるなど、いろいろ仏陀についての考えよう、味わいようによって、その人その人の仏教になってしまう。

であるというのである。この味わいを十分に味わって十分に明らかに云いあらわすときは、恐らくは仏教全体の上についてすべての様子が大いに変ることと思われる。

今これを少しく歴史的に云えば、そも／＼仏滅度から仏陀の教団が上座部、大衆部と分れたが、この時にはや仏陀についての思想が大いに差異を生じて来た。上座部は仏陀を人間の側に見て、自分等と多少の差異はないと云うている。大衆部の方は仏陀は無限の寿命、無限の光明であるというてゐる。上座部は律法的に陥り、大衆部は信仰的になりがたい仏陀をみとめたのである。下って聖道門、浄土門の二大潮流の上についてみても、この二種の傾向は著しくなった。聖道門はその名のように大聖釈尊の道であって、これを辿って仏果にまで達せんとするので、つまり仏陀と我等とは共通点の著しいものとして、釈迦何人ぞ、我何人ぞというのである。このように非常な意気こみをもって進んで行って、はたして最終目的に達し得べきかというに、この道は實際上到底通ることの出来ぬ道である。この聖道の教門の塞がってしまった最後に、仏陀の方から我々に向かって開いて下さったのが浄土の一門であって、この浄土門の信仰にあつては、实际的に光明無量、寿命無量の広大な仏陀の恵みをよろこび、名号を称えるのである。この真実絶対の仏陀をはじめから喜ぶことは出来ずに、かえって

今親鸞聖人は如何に仏陀を考えられたかということが、聖人の教行信証の中「真仏土巻」において顕わしてある。それはどうあらわしてあるかというに、聖人は真の仏陀は光明無量、寿命無量の覚体であると定められた。この無限の光明、無限の寿命の仏陀には、或は時間的に縦に際限なく、空間的に横に辺際なき哲学的実在なりと解釈するものもあるが、ただそれだけで慈悲の御仏ということに気がつかねば、それは宗教の中心としての仏陀ではない。聖人の示したまう仏陀は無限の慈悲と無限の智慧との塊りであるが、聖人はこれを理屈から考えられたのでなく、自ら仏陀に遇い奉って光明の摂取にあずかったそのままの告白である。この仏陀の境は即ち彼の応身の釈尊が八十年の生涯をおわって還帰せられた涅槃の境界である。

この涅槃の境界をくわしく説いてあるのが「大般涅槃經」であつて聖人は真仏土の巻には皆これを引いて置かれている。聖人の意によれば一代の経にとかれた沢山の如来は、皆光明無量、寿命無量の仏陀である。即ち阿弥陀一仏定善（じょうぜん）の人と名づける。

「観無量寿經」には定善の観仏にたいして十三の観法を説いて、まずこの世界の太陽を観想（かんそう）し、次に池水を観想し、それから進んで極樂世界の阿弥陀仏、観世音菩薩、大勢至菩薩等まで観想して、この肉眼をもって明了に仏陀を拝し得るまでやって行く方法を示してある。その次にはこの眞想観察を修し能わぬもののために、行者の實行の勝劣、意志の強弱に応じて、九品の階級を作つてそれぞれの行法を示してある、これを散善九品という。かの聖道門の種々の行法は、人間の千差万別の心に応じ、境遇に応じて、色々と仏陀の恵みを説き示したのであつて、これを約すれば観經の定散二善の外に出るものはない。

その定善、敬善の行者の心に応じて示現するところの仏陀は、種々無量であるが、要するに仮設、假想の仏陀である。このような無量無数の假想の仏陀も、その本は唯一眞実の仏陀が万差の人心を救済せんがために善巧方便を以て分身示現したまえるところであつて、南無阿弥陀仏以外の

ものはない。その万差の人のためにしばらく開いた法門に
とどこおって、仮りにあらわれた仏身をたのんでいては、
真実絶対不動の安心に住することはできぬ。故に親鸞聖人
の和讃には

念仏成仏是れ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土を得ぞしらぬ
と慨歎せられてある。

さて真に広大な仏陀を認めずに、衆生が自己の智分に随
って、種々別々に種々無量の仏陀を眺めるのはそもそも何
から起こるかというに、広大な仏智不思議の力をみとめず
して、衆生自身が仏のように行うて仏の許に往こうと考え
るのが原因である。

絶対無限不可思議の真実境から仏陀無限の慈悲をあらわ
して罪惡の凡夫を救済して、光明寿命の靈界中に入らしめ
ようとて、ことさらに成就して下さった自然の浄土、極樂
世界を根本的に疑うて、そういうことはどうしてもあり得
ぬことと思うで、自ら仏の如く作(な)そうとして行くから
起こるのである。換言すれば仏智不思議の如來の真心を凡
夫の小智をもってへだて、絶対無限の仏に對してかえって
自己の思想から局分をつけて眺めて行くのである。

真実の仏陀はただ慈悲である。然るにその広大な慈悲を
疑うて信ぜず、自力をもって行こうとして種々に仏を覷じ

ば何事もならぬというところで、真の仏陀の光を見、真の
信仰に入るのである。人生道を求めて、仏によらず、宗教
を信ぜずして、自分の善根に腰を据えている間は信仰には
入られぬ。種々にもがいた最後に、自分では到底行けぬ、
仏によるの外なしと一旦氣づいてきても、その心持が仏に
よって道徳を進め、信仰によって偉人にもなるうと考えて
いる間は、仏が見えても、仏智不思議が見えぬ。唯善を行
ずる方便として仏を覷じて交わるのである。理想の仏であ
り、想像の仏である、絶対的に仏による真の信仰でない。
法然上人が唯南無阿陀陀仏あるのみと云われたのを、そ
の当時の人の中には、念仏を唱えて修善して行こうとする
考えの起ったのはそもそも何故であろうか。仏陀の絶対の
恵みをみとめずに、仏を仮想し、念仏によって仏に近づい
うとするので、念仏を道具にしてしまうのであって本当の
ところに行けなかったのである。

これは千古万古同じ問題である。西山、鎮西の人達がい
うたからとて、これを七百余年の昔のはなしとしてはなら
ない。現今でも自分は倫理道徳を実行してゆく、それが宗
教であるとか、宗教によって自己の行を善くしようとい
うのは皆宗教を手段にして、理想仮想の仏陀によって安心し
ようとしているのであって、つまり行くべきところまで行
かずに、半途にさまようているのである。空しく仏陀に遠

仏を行じて行くのであるから、絶対無限の慈悲を信ずる真
実の信仰に入ることが出来ずに、かえって定散二種の善根
を策励するようになるのである。かと云って、あながちに
善本徳本の名号を称え、諸善万行を修するのが悪いとい
うのではないが、信仰の極処から云えば、我れ能く善を行
うというの誤りであると云うのである。絶対真実の善は仏
以外にないといふことの解らぬ間は、真の信仰でないとい
うのである。

この点は古來信仰問題にとってもっともむつかしいとこ
ろで大いに注意を払わねばならぬ点である。しばしば云う
ように、我等は大聖の道を進んで仏果にいたることは到底
出来ぬ。出来ぬことをしようとするから律法的になる。浄
土門はただ行き易いぐらいではない、唯有(ゆい)浄土
一門で、他の道ではどうしても行かれぬのである。初めか
ら絶対一門である。その絶対一門が開けてきて、仏の恵み
ばかりで助かると頂けぬ限りは、仏をば向うにおいて、こ
れにすがりついて念仏することになる。それではたとい一
心に向かったところが、向こうたり、念仏したりすること
によってたすかるのであると自分で局分してへだてている
ために、真の仏の恵みに遇うことが出来ぬ。

世の中に善という善は、仏以外にはない、自分は善を行
うことの出来ぬものである、唯真実な仏陀の恵みでなければ

ざかっているのである、だから往生以後も極樂の辺地に生
れる。そこで中心から仏の恵みが頂けて頭が下がったので
ないならばとれだけ身を低く持つても心底には慢心を捨
てていないのである。一方には慢心を捨てず、一方には行
くべきところまでゆかず、懈怠に流れているから懈慢界に
生れるのである。仏の恵みをみとめずに、自分でどうして
こうしてとはからって、小さい城廓をかまえて局分してい
るから疑城に生まれ、真実の仏心を見ないから死後にも極
樂の三宝を見聞することが出来ないというわざわざいを受け
ねばならぬ、これを胎生とも胎宮とも名づける。

要するに真に仏陀の恵みが聞えた信仰の人なら、三界流転
の牢獄を出ることが出来るが、もし真実の恵みが聞こえな
い時は、ただちに親の家庭へ帰ることが出来ず、たとえ業
繋の牢獄を出ても、なお半途にとどこおって、善くなつて
からよくなつたらと善根の城中にたてこもって自力の作善
にふけている。

このように絶対の恵みの知れない間は、各自の力次第で
信仰に浅深がある。九品(くほん)の階級が分れる、した
がって浄土の果報においても九品の差別が出来るので、親
鸞聖人が一代の間大いに憂いたもうた点である。世人はこ
の仏の恵みを知らずに各自がまちまちの所信をいだいて相
争うようになる、あさましく歎かわしいことである。真の

仏の恵みに入らして、凡夫も、聖者も、五逆のものも、誦法のものも、皆同一鹹味となつて、相見て慶樂する別天地を開かしためたいというのが、聖人の一生涯であつた。現今日本の社会も一旦信仰の方面に心掛けて居つても、この仏智不思議という点が見えぬから、自分が宗教道徳によつて善くしようと考えているから、動けば動くほど皆結果は虚仮におちいつてしまふのである。

ここに注意せねばならぬことは、聖人一代の間、ことに説かれたところの三願の真仮の法門である。法然上人は唯第十八願の一つだけ掲げて、十方衆生、唯南無阿彌陀仏の一つでたすかるといふことを正面からきわどく説かれた。親鸞聖人は第十九願、第二十願を指示して、絶対の恵みが分らずに自らの善根でたすからんとする人をも、終には眞の恵みを知らしめて往生せしめんとするのが第十九願の意である。又自分は善根も功德も及ばぬが、どうか仏陀の加被力(かひりき)によつて善くなるうと、一心に念仏ばかり称するものをも、終には仏の恵みに入らしめんとするのが第二十の願の意である。法然上人の門下の中でも、鎮西の聖光坊は、諸善万行を修するものも往生すべしと云い、西山の善慧上人は、往生の道はもとより念仏の一つである、念仏を称する時はその力で往生すべしと云うた。現今の信仰問題の上でもこれらと同じ傾向がある。要するに

疑いをはらさず遂に救済せんという慈悲の施設である。歎異抄に、

自らのほからいをさしはさみて、善惡の二つについて往生のたすけさわり二たように思うは、誓願の不思議をばたのますして我が心に往生の業をはげみて、申すところの念仏をも自行になすなり。この人は名号の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども辺地懈慢疑城胎宮にも往生して果遂の願の故に報土に生ずるは名号不思議の力なり、これすなはち誓願不思議の故なればただ一つなるべし。

又、聖人の和讃に

定散自力の称名は 果遂の誓に帰してこそ
おしえざれども自然に 眞如の門に転入する

とある。広大の本願の不可思議を信ぜずして、自らはからいをもつて名号をわがもの顔に称する自力の念仏も「不果遂者、不取正覚」の広大な願力によつて、遂に第十八願の絶対の恵みに入るのである。このように仏智不思議を信じない者をも、遂に信ぜしめるのが仏の威神功德不可思議力である。

世には見仏とか見神とか云うて、仏陀のお姿を眼に見て信仰に入つたとかいう事実のあるのは、それは眞実の仏陀を拝したのではない、仏陀の化身を見たのであつて、即ち

如何に仏よ仏よと呼んで居ても眞の信仰でないから、聖人はこのようなものを方便假設の願にとどこおつたものであつて、仏智不思議を疑うから小さい局分のところにしか生まれられぬ、仮願、仮仏ではいかぬと厳しくいましめて、必ず如来の本願でなければならぬと教えられた。

私は久しく親鸞聖人の説き振りをながめて、これは方便假門ではいかぬぞと、おとしりぞけられて、絶対を立てたのである、第十九願、第二十願は諸善万行、自力念仏の人を打ちこむ監獄のようなものであると考えて居つた。しかしよく味おうて見ると全くそうでない、私共の信仰の経験から思うて見るのに、自分の力でなければ行けぬと考へた人ならば、其人自身の心にまかせたならば、永く仏の恵みに気づくことが出来ぬ。仏智不思議を疑う人間はいかぬとしりぞけてしまわれたら、何時までも信仰には入られぬ。仏智を信じない者に信ぜしめる道が開いてあつてこそ、如何なるものもついに救済を頂くのである。子がへだてるから親もへだてるのであれば何時までも子のよくなるためしはない。仏智不思議を我等の方からへだてているが、それを仏はすこしもへだてず疑わずして、これを導いて仏智不思議に入らしめんとするが、第十九、二十の方便の誓願を設けて下さる所以である。だから十九、二十の誓願は自力疑心の者の入るところの監獄ではなくて、疑う者の

それが方便引入の一つである。仏身を見るばかりでない、或は痼疾とみに癒えて信仰に入つたとか、其他種々無量の御催促からついに眞実の信仰に入らしめて頂くのである。

親鸞聖人は「定善は觀を示すの縁なり、散善は行をあらわすの縁なり」と断定せられたのはこの理由からである。要するに信仰は偶然に起こるのでない、第十九、二十の誓願の力からいろいろとはからわれて、遂に絶対の信仰に引き入れられるのである。親の恵みを知ることが出来なかつたものが、遂に信ぜられるようになったのは、一応ならず再応ならず、幾度も幾度も親が念力を運んで下されたからである。そうであるから仏土について眞仮の判別をもうけられたのは、単に眞仮の簡別をするのでなくて、仏陀を疑う者をも仏陀はいよいよ捨てたまわぬということを明らかにされたのである。もう一つ云うてみれば、人生において何事が出来てきても、仏陀広大の恵みに入る御縁になつていふように、仏智疑惑の者が遂に信仰に入るといふことを示すのが眞化仏土巻の要点である。

(親鸞聖人の信仰)



『青蓮華』歌抄 (一)

夢殿

わが罪の狂ふ荒野も無碍光の照らしたまへば何をか恐れむ

夢殿にこもるとこよの寂けさぞ救世の菩薩の御声なるらし

夢殿をじらす永世の寂けさにわれはひじりのみ声をきくも

浄きみくに

白雲のいざよふみれば父をおもひ母をおもひておもひつきすも

父をおもひ母をおもへば弥陀仏の本つ誓をきくがうれしき
弥陀仏の浄きみくにに父母はわれをよびますか御名をた

慢りつ懈りつして背くわれに誓願常に離れたまはず

生き死にの海にしづみてわれを喚ばす聖ひじりをおろがみまつる

生きてあらば生くるがままに死にゆかば死にゆくままに御名をたたへん

不可思議のみちかひの御名ききまつり聴きまつりつつ生くる命か

霧の海

乾枯びしわが心かもシベリアに吾子囚はるるに狂はんとせず

わが生命すてなば吾子がシベリアゆ帰りにくくば捨てんよいのち

この一生荷負ひはたらきすこすともみ仏のみ名に心足らん

草露

草の葉におく露よりもはかなきを己が命に見つつ臥しを

白井成允

たえて

弥陀仏のみちかひゆゑに天地のおのづからなる寂けさに入る

あした夕べみ仏をおがみ経誦せど悲しきかなや真心もなし

わがために苦しみますか諸諸の菩薩の狂ひ乱れおはすは

世を夢とのり救はまく夢寐にだも誓ひ立たすかも救世観世音

柿の浦

嘗てわが病に臥ししこれの室恩師の軸の今もかかれる

病むときは病むがよしとふ良寛の言葉をおもひ吾は臥しをり

秋の野の光しのべとたまはりし紫淡きりんどうの花

匙をもて重湯をわれに含まする妻のおもわの何ぞ憂れたき

掃郷

一の関の駅をすぐれば人人の言葉なつかし故郷のひびき

夜深み雲もおほふか恋うて来し岩手み山は見えわかずけり

幾山河すぎこし跡のこごしきにほのぼのと照るおん光かも

故郷の街安らけくにぎはふに心なごみて友と歩めり

法隆寺

千年の秘仏の裂みよ底ひなき涙たたふるそのおん裂みよ

世の濁りあまりに厳しみ仏は聖衆とともに御身をやきませり

赤色赤光
わがよき子珍の愛子よ汝去にて生けりともなくわれはさまよふ

此世にてあふ時をなみ彼世よりよびます吾子の声を聞きなり

仮の御身を吾子と現はし常住のみ法を告げて迅く還りませ

劫初より吹き荒びこし業の風その源身にあり逃れ得べしや

世を夢と告り知らさまく夢殿に誓ひ立たすかも救世觀世音

おのづから三世の仏のみ誓ひにみたされまつるこの生命かな

御影は微く遠くなりおはせ御心いよよ近まさり賞ゆす
人の世の直き大道あかしつつ児等がゆくへを示させおはす

新刊書紹介

歌集「青蓮華」

白井成允

頒価 二千円 送料 三百円

発行所 京都市左京区下鴨東高木町二三ノ四

自照舎

振替 京都 六八四八番

藤 秀すい 師「後記」抄

こういうすぐれた作品を持ちながら、その生前に「歌集」を作ろうとせられなかったのは、一つには作者の寧靜謙虚な性格にもよることと思われる。「文は人なり」と明治以来よく言われて来たが、それは詩も歌も俳句も人であるが短歌はことに人そのものである。

世にかかるうつくし歌集ありなんやうつくしき歌うつくしきこころ

世の濁りお身の濁りをなげきます濁りなき歌うつくしきうた

昭和五十年二月十三日

いのちのよろこび

(一)

高千穂 徹 乗

私は八歳の春に父親にわかれしました。私をかしらに四人の子供をのこされて、母親は二十八歳の若さで、お寺の本堂を再建し、四人の子供を一人まえに育てあげてくれました。私は小さい時から身体が弱く、二十歳まで生きたら幸せだと医師からいわれておりました。

十六歳の春、熊本の中学を卒業した私は、京都の仏教大學（龍谷大学の前身）に入学、それから三十余年の間、京都において、ひとすじに求道と研究の道を歩みつつきました。しかるに四十八歳のとき、思いがけぬ大病にかかりましたので郷里にかえり、熊本大学の附属病院に入院して鱒淵博士の執刀で手術をうけました。幸に九死に一生を得て退院、ふしぎにいのち長らえて、今日に及びましたが、発声機能を失って声がないままに、不自由な日々を送っております。

病後二十六年のあいだに、私はいろいろな人生の問題と対決し、人間の課題について深く思いをめぐらすことが出来るようになりました。まことに病氣は人生の臨時増刊でありますが、

私にとっては、静養の日々が、苦難の試練にたえる道場でもありました。余命いくばくもないことを思うにつけても、私は一日一日の生命をたいせつにしなければならぬと思ひ、また一日一日の生活を無駄にしてはならぬと考へて、みずからをいましているのであります。

私の病氣は声帯の下に肉腫（にくしゅ）ができたので、これを治療するために気管の一部をきりとる手術をうけたのであります。しかるに、肉腫はガンよりもたちのわるいもので、手術の後には、早い時は三月か半年のうちに、再発していのちのちりになるといふことでもあります。それで私は退院後、ひそかに身のまわりを整理して、最後の日の近づくの待つたのであります。人間は誰でも一度は死んでゆくものであることは、よくわかってはいますが、自分のいのちが終りに近いことを知りながら、一日一日をみちたりた心で、たのしくすごしてゆくことは容易なわざではありません。

私たちは、毎日生きることに一生けんめいの努力をつづけていますが、生きることは、そのまま、死に近づいていくことで、生と死とは表と裏のように一体であります。しかるに私どもは多くの場合に、この二つをわけて、ただ生きることだけに夢中になり、ただ死ぬことだけを心配しております。まことに私の存在は、その一分一秒が死に直面している生死的存在であります。そして真実の宗教は、この生死的存在としての私の問題を解決するものであって、単に生きることだけのために、ご利益をあたえるものではなく、また死ぬことの恐ろしさだけに、力をあたえるものでもありません。生と死とを一枚のものとして、生の依るところと、死の帰るところを明らかにするのが宗教の本質であります。

○ 私たちは「死」に直面するとき「生きる」ということについて深く考えるようになり、死と対決することによって、まことの生の意義が明らかにされるのであります。言葉をかえていえば、私たちがこの現実を力いっぱい生きぬくためには、いつわりのない私のすがたを、はっきりとみつめて、生死の問題ととりくみ、真の安心立命を体得することが肝要であります。

この頃私たちは、おどろきというものが次第に少なくな

底にたたきおとされ、最も幸福であった青年が、たちまち最も不幸な人間となり、生きるのぞみを失ったのであります。

更にここでいま一つの話があります。先年問題になった「生きる」という映画の主人公は、ある市役所の仕事を三十余年のあいだ忠実につとめあげた庶務課長であります。この老人が病院で胃ガンの診断をうけ、死期の近いことを知らされたとき、過去三十年の生活をかえりみて、そのむなしさにわびしい思いをいただきます。彼はさびしい心になえかねて、酒色の世界におぼれてゆきますが、一時の享樂はいよいよ彼の悲しみと淋しさを増すばかりでした。頼りにしていた一人の子供は、その妻とともに、父親の死んだあとの遺産のことばかり心配しているようなことで、老人は総ての希望を失い、絶望の悲しみに泣きいるのでした。

前にのべたように私たちは、自分の死と対決し死に直面するときに、しんけん^①に自分の「生きる」ことについて考えるようになるのであって、ここに私共の生活の転機があらえられます。「愛と死」の主人公である青年は、愛人の突然の死という事実^②に直面して、生きる希望を失ったのですが、そのとき彼は、かすかに遠くから自分を照らしている晩の明星のような光を感じたのであります。それはつまり美しい母の姿であり、やさしい母の笑顔でありました。彼

っているようであります。死の灰や死の雨が降ると聞いても、さほど驚かず、交通事故による多数の死傷者の記事^③をみても、大火や水害のニュースを聞いても、あまり驚かぬようになりました。

先年私は、武者小路実篤氏の「愛と死」をよんで強く心をうたれました。愛人と別れて欧州に留学した青年がいよいよ帰国することになって、明日はその愛人の待っている日本の港につくという船の上で全く突然に愛人の死の知らせをうけとります。この青年はその時の心境を、次のように告白しています。

人生が無常であり、悲惨なことがいくらでも起りうることは、僕は理窟では知っていた。しかし自分がこんな目にあうとは、あうまでは思わなかった。人間は自分のあわれさを知らない、私も知らなかった。私は喜びにあふれて日本に近づくのを待ちかねていた。われらは自分が死に近づきつつあることを忘れていた。それは健康の証拠である。しかしあわれではないとはいえない。船が香港につく前、一つの電報は私に宙(ちゆう)がえりをうたせた。桜がぱい咲いている春の世界が、一変して灰色の冬の世界になった。それ以上の変化をうけた。これこそ私を生死の境まで追いやったものである。かようにこの青年は、よろこびの絶頂から悲しみのどん

は次のようにのべています。

今まで自分は、ほとんど自分を待っている母を忘れていた。忘れないにしろ念頭になかった。おいていたろうが、夏子のことを思う方が強すぎた。いま自分は不幸のどん底で母の愛を感じた。母が待っていてくれる。かくて、この惨酷きわまる運命に、どう復讐してやろうかと考えていた青年は「生き残った以上、僕は何かしませす」とさけび、また「私はどうすることもできない。できるのは生きている人間のために働くことだけです」とふ

るいたつ心をおこしているのであります。また前にのべた映画「生きる」の主人公は、悲しい絶望のどんぞこにおいて、その町のすみにある広場のなかに、小さな公園を作る仕事を思いたち、残された半年の月日を、希望とよろこびにみちた心ですごし、病苦にたえ、さまざま困難とたたかい、遂に完成した公園のプランクに乗りながら、雪のふる夜に、ほほえみつつ死んでゆくのであります。

右にのべた青年と老人の姿は、ともに「人生いかに生きべきか」という人間の根本問題にふれている点において、私どもの心を強く動かすものがあります。

○ 今日の多くの人たちは、ただ世俗の習慣のうえにすわり

こんで、宗教のまねごとをしているだけで、自分自身にあ
たえられた課題として、まさしく宗教を信ずるのか、信じ
ないのか、それをきびしく自分にむかって、たしかめよう
としないようであります。

一般に宗教の信仰について考えるとき、いつもそこに二
つの動機を見出すことができます。その一つは人間は必ら
ず死ぬものだということ、その死と対決したときの動揺と
恐怖、さらに他のひとつは私の罪悪の内観であります。

私は自分の頭の毛が白くなっているのに、心は俗世のち
りに染まり、死ぬまで欲のおもいと、いかりとぐちの心を
捨てることはできない。また私はたとえ頭の毛を剃って
も、名譽と利欲と高慢のこころを取りさることはできませ
ん。法衣の色は美しく染めても、自分の心をほとけこ
ろに染めようとはいたしません。

地獄、餓鬼、畜生のすがたは、遠い世界のことではなく
て、なまなましい現実のすがたを示したものであり、また
知らぬ他人のことではなくて、この私ただ今のすがたを
描いたものであります。

私たちは人間である限り、この死と罪の問題すなわち無
常観と罪悪観、この二つの動機は必らずもっているはず
で、いやでもこれらの問題に直面して、自分で自分の心を
きめておかねばならぬ重大事であります。自分はそれに直

るように、私どもの一生には笑う日もあれば、泣く日もあ
ります。泣いて悲しみがうすらく時もありますが、涙も出
ない、死ぬほどつらい悲しみを、じっとこらえて強く生き
ぬかねばならぬ時もあります。しかし、どのような苦しみ
にも、悲しみにも、うちくだかれることなく、それらの不
幸にうちかち、そこから立ちあがって、力強く生きぬくこ
とは、決してたやすいことではありません。生きて行くこ
うことは、こんなにもつらく、せつないことかと、ねむ
られぬ夜を、なやみあかした私たちは、ともすれば、その
悲しみや苦しみのためにうちのめされ、不幸にうちくだか
れやすいのも、もつともなことでもあります。(続く)

ゲエテの言葉

涙とともにパンをたべたことのないひとや
むねにあふれるなやみのなかに夜をすごし
朝の光を待ちわびたことのないひとは

ああ あなたを知りません

君よ！ 天のもろもろの力よ！——

1 ウイルヘルム・アイスター

面してどのような態度をとるか、それによって、私どもの
生きかたが決定され、私どもの生活の目標が明らかになる
わけであります。

しかるにこのごろの私たちは、これらの問題に対して、
全く無関心のようにあります。そしてこのような自分の心
のたたかひについて経験の少ないことが、現代人の精神の
空白となって、さまざまの障壁をつくっているわけであり
ます。

社会的な問題の研究と実践は、戦後に長足の進歩をとげ
ました。しかし、そのなかにも何かわりきれない、もの足
りないものがあるのは、その社会を構成する人間、その人
間そのものの本質を問題とし、それについて探求すること
が忘れられているからではないでしょうか。

人間の知性と技術で解決されない大きな不安のまえに、
現代はいかがわしい類似宗教を多く産み出しました。まこ
とになげかわしいことでもあります。現代人の宗教はその人
の知性にうなずける科学的、哲学的な思想をもつものでな
くはなりません。またそれは特殊な場所や特定の行儀の
なかで語られる宗教ではなく、いそがしい私たちの生活の
場において、実践されるものでなくてはならないのであり
ます。

この世には、照る日もあり、雲る日もあり、嵐の日もあ

○ 高いところにいる人ほど、悪魔に誘われ易い。

○ 常に自分の時代にとらえられていて、その時代にあるも
のからばかり栄養を受けている者は、その時代と共に消え
るうたかたである。

○ 同時代の有名な人だけを学んだとて何にもならぬ。幾百
年、幾千年を経っても、すこしも値打ちが落ちずに尊敬さ
れているような著書を残した、昔のえらい人を学ぶがい

○ 一体ものを知っているというのは、物を知らない人のこ
とだ。知ることが多ければ、わからぬことが増すものだ。

○ 自分と性質の似ている者を愛してそれを友達にするとい
う風な人々と、自分と性質の反対な者を愛して、それから
学ぼうとする人々と二様ある。

○ 誤謬は絶えず繰返して世に行われている。その故に人は
飽くことなく真実を繰返して述べねばならぬ。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

い て く だ さ る

わ た し が い る

わ た し が い る

わ た し が い る

わ た し が い る と こ ろ

わ た し が あ る と こ ろ

い つ で も ど こ で も

い て く だ さ る

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ さ ま が

い て く だ さ る

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

光 り へ 往 か ん

ナ ン マ ン ダ ブ ツ は

光 り が 呼 ぶ 声

み 名 称 え 之 つ つ

み 名 に 聞 き つ つ

呼 ば る ま ま に

光 り へ 往 か ん

呼 び 声 が

ち から な り け り

旅 の 空

雨 ふ ら ば 降 れ

風 ふ か ば 吹 け

ナ ン マ ン ダ ブ ツ

ナ ン マ ン ダ ブ ツ

一 本 道

一 本 道

一 本 道

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ の

一 本 道

親 鸞 聖 人

七 高 僧

み な 往 き ま せ る

一 本 道

涅槃 に と お る

一 本 道

一 本 道

一 本 道

一 本 道

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ の

一 本 道

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

不 思 議 は

誓 願 は わ か っ て も

誓 願 不 思 議 は

わ か ら ない

名 号 は わ か っ て も

名 号 不 思 議 は

わ か ら ない

不 思 議 は 不 思 議

ど こ ま で も

不 思 議 は ア タ マ ジャ

わ か ら ない

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ と

い た だ く だ け

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ と

い た だ く だ け

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

念 仏 こ そ は

お 念 仏 に 聞 き

お 念 仏 に 聞 き

常 に お 念 仏 に 聞 き

お 念 仏 に 聞 き

お 念 仏 の お 智 慧 に

照 ら さ れ て

自 分 の 道 に 立 ち 帰 り

立 ち 帰 り し て

生きるのだ

念仏こそは燈炬なり

〃無明長夜の燈炬なり〃

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

サトリは

わたし無相は

『歎異抄』そたち

親鸞聖人『歎異抄』に

〃浄土真宗には

今生に本願を信じて

かの土にしてサトリをば

ひらくと

ならいそろうぞ——〃

サトリは来生

臨終一念の夕べ——

この世じゃサトリは

ひらけない

〃バカは死ななきや

なおらない——〃

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

信者は

信者はお一人

ナムアミダブツさま

お一人——

わたしは信者に

念じられてる者——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

念じられてる者——

〃唯除五逆誹謗正法〃

ただひたすらに

〃常於大衆中

説法師子吼〃

常に呼びかけ

たもうなり

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

近角常音先生を憶う

花田正夫

昭和二十八年八月六日、常音先生は七十一歳で亡くなられました、今年は二十三回忌となりました。常観先生は昭和十六年十二月に七十二歳で示寂せられました。私も馬齢を重ねて年だけは先生方と同じになり、あらためてお慕い申すところも切なものがあります。

さて常音先生は、私が昭和二十五年の夏から心臓病でほとんど門外不出の生活を続けていますことを非常に御心配下さいまして、御自坊の御用を終えられてのお帰途に、奥様お附添いで御見舞い下さいました。

先生のご慰問に接し、ことに先生の心臓が非常に弱っていられる御様子なので「私こそ先生をお見舞い申さねばなりませんの」と非常に恐縮いたしますと

「ほんとうに話を聞いてくれる人があれば九州までも行くよ……」

と即座に仰言った時、ハッと胸打たれました。外見いかにも静閑なお生活と拝察される先生のご内心には、身命を捨てて惜しまずとの烈火の燃えていられる、そこにやむに

やまれぬ大悲の切々たるものに触れました。譬えて云えば、それは非常ないきおいで回転している独樂（ごま）は外見には静止しているように映りますが、一寸でもそれに触れると非常な衝撃をうけると同じであります。無限の静けさの中に、無窮の活動があり、無窮の活動をうちにひそめたまま静寂を保っていられるのであります。そこに仏法本来の面目の涅槃、寂靜無為のあらわれを先生の上に拝してハッと驚いたのであります。

このことは、常観先生が脳溢血でたおれられ、一年間の面会謝絶の御静養もすこし解かれた頃、京都から池山先生がお見舞いされた時に強く感じられたようであります。それは、内に外に大きな働きをせられたのに、病床生活とてどんなにかあじぎなく思っているだろうかと病室に入るのもすこしためらいながら訪づれると、満面に笑みを浮かべられて、動きにくい右手を左手で支え、握手をかわされ、開口一番、

「教行信証真宗存す、信界建現何ぞ狂奔を要せんや

歎異一篇後昆に伝う、思想險悪何ぞ論ずるに足らん」
との詩を示されて、

「自分は信界建現、々々々々と口に筆に狂奔して来たが
教行信証さえあれば真宗は不滅である、又歎異抄が後世
まで伝えられていくから、どんなに思想が險悪になろう
とも、必ずそこに解決の光が現れると確信している」

と、あたかも今親に会って身も心も温められてつやつや
していると云った、何とも云えぬ麗容であられたとお聞き
しました。そこにも寂靜さがただよっています。

その池山先生も、晩年に大病せられ、ようやく恢復にお
もむかれた時、お見舞申していた時、フト、つぶやくよう
に、

「ただ念仏してのたのもしさを、身体さえよければ日本
中走り廻っても聞いて貰いたい……」

と独語せられたのに、私は静中にみなぎる動の姿に心う
たれました。

さて、常音先生のお見舞を頂いた時、先生の御健康状態
から推して、二度とお目にかかり難いという心持がいたし
ましたので、御揮毫をお願いし、半切に御名号、短冊には
生涯を支えて下さるお言葉として

常観言 またやりそこないまたやりそこない

学校を中退せられて東京に出られ、学舎にあって、常観先
生の御手伝いをされながら二十年近く聞法を続けられまし
たが、その間に色々な経験をせられました。

はじめの頃は「兄は信仰を獲て大いに活動している。自
分はやくざ者であるが、信を獲てしっかりやろう」といっ
た風な、信心を利用して自分がしっかりしようというお考
えもあったと承りますが、その間違いに気付かれて、信心
とはそういうことではない、信心を獲ても、えなくても三
尺の蛇は何時までも三尺の蛇で、長くも短くもなれるもの
ではない、という風に転じられました。

其後、時には非常に有り難い心もおこり、今度はほんも
のかと喜んで居られても、それも一二月で消えてしまっ
たことも数回ありだったのであります。その中には言
葉もなくなつて常観先生と談合せられることもなくなり、
常観先生も特別に常音先生に説かれるということも無くな
つたのであります。

こうした歳月が徒らに過ぎ去つて、日曜講話の日に外出
も出来ず、かといつてどうせ聞いたところで解るものでは
ないと、心は堅く閉ざされたまんま、会館の片隅で聞法を
続けられた由であります。

そういう状態にあって、自分はいくら聞いても信心は獲
られない、一生やくざの、できそこないで終るより道はな

それだからお呆れないお慈悲でないか
常音書

と書いて下さいました。それにつきまして昭和二十六年
六月一日の求道学舎五十回創立記念日の夜、佐藤強三郎氏
に、先生が記念として書いて渡されたものを誌します。

「弟を子供の時より育てたけれども、彼に別段不足はな
けれども、彼奴が、いつまでもいつまでも我慢が止まぬ
のには、あれは困ったものだ、可哀相なものだと、兄さ
んが、愚痴をこぼしていましたよ」と、この嫂（常観先
生夫人）の一言には、初めてお慈悲の片鱗を知らせて頂
きました。

「一旦わかつたと思うては、また間違ひ、また間違ひ、
それだから、何処までもおあきれないお慈悲でないか」
との亡兄（常観先生）の一言は、現に間違ひている私の
心には、鉄砲弾の如く命中して、真にお呆れ下さらぬお
方は、人生唯この御一人なることを知らせて貰いました
以上、常音。

さて常観先生は二十九歳の御時、真の最大良友は仏でま
しましたと信心の眼がひらかれましたから、東京を中心と
して大きな活躍を始められました。常音先生は第四高等
い、淋しいことであるがやむをえぬことである。ただしか
し、このどうしても信心がいたただけぬ自分であるから、た
とえ頂けなくても、頂いた人と同様にへだてなく兄があつ
かってくれさえすればそれで満足である、とこういうこと
も考えられたのであります。このことを直接に打ち明け
て話せばよかつたのに、自分は兄に対して信心のある人を
よくして、信心のない者はうとんじられるという偏見を持
つて居りました。そうではなく、そういうことにおへだて
のないお慈悲であるので、自分が勝手に兄をへだてていた
のでしたと感慨深く語って下さいました。

とつおいつ、あれも駄目、これもいかぬとくりかえされ
るうちに二十年の歳月は夢とすぎ、形ばかりの聴聞を続け
て居られました或日のこと常観先生が「弟の我慢のやまぬ
のには困つたものじゃ、可哀相なものじゃと愚痴をこぼし
ている」と人づてに聞かれたのであります。

その時、常音先生は「兄貴はひどいことを云う。自分は
信心がない、兄貴は立派に信心でやらせて貰うているから
自分は兄貴の言う通りに万事したがっている、兄貴に対し
ては従順にしている、すこしも我慢は出してない。それ
なのに我慢がやまぬとはあまりに酷な言葉である、全く心
外にたえぬ、人の心も知らないでよくもまあえらそうなこ
とが言えたものだ。自分の心を知らぬのも程があると、兄

貴の見損いをうらみ、にくみ、かなしみもして、遂には兄貴の家を飛び出そうとまで考えた。かように最初は大いに憤慨し、興奮し、さては懊惱、煩悶を久しくしたのち、さてよ、すべて物の値打ちは買手がつけるので、自分がどんなに従順にしているつもりでも、兄貴が我慢のやまぬ奴と見ている以上は致し方がない、自分で自分は解らぬのだから、それはそれとしておこう。さてそれ程我慢のやまぬ奴であれば、出て行け、わしの手ではしかたがないとなるのが世間の常で、それほかないのに、我慢のやまぬのが可哀相だといつも心にかけてくれて、愚痴までこぼしていくれるとは、これはありがたいことである、世にも不思議なものもいるものだ、兄貴の実意に気づき、やがてその心は祖聖のみこころであり、釈尊の本懐であり、そのまま弥陀仏の大悲でありましたとなり、ヘナヘナと仏様のふところにこるげ込みました。そう気づいて自分を省みますと、自分は立派にやっている、力の限り陰になり日向になつて骨身惜しまずやっていたなどと思つていたことがそのまま我慢心であつたかと気付いて、自分の全体が我慢のかたまりで、剛情、傲慢のまいらせ心の強い身に驚きました。それにつけ兄貴は、弟に何の不足はなけれども、あれのいつまでも我慢のやまぬのには困つたものと、蔭ながら始終自分のことを気にかけてくれたとは、兄貴の実意に気づき、

す、いやすすめるといふよりむしろ責め立てたのです。

これもあとから知らされたことですが、まことにひどい話で、一分一厘もどうにもならぬ身を仏はかねてしろしめされて、向うから来て下さる、それより外に凡夫の救いはないのに、自分はお慈悲に気づいた、お前もはやくこまでこい、と責めたてたのですから、相手はたまつたものではあります。そこで家庭の空気が陰悪になったのです。

さてこのことは家庭内ばかりでなく、沢山僧侶や宗教家が会合する時などに、口には出さなくても、内心では相手を輕蔑しへだてる、すると相手もこちらを敬遠し無視するという具合になりました。一事が万事です。あらゆる問題につきあたり、五分と五分の争いをする、そういう調子で全く内外ともに無茶苦茶な生活になりました。

そこで種々と苦心いたしましたでしたが、よい智慧も出ません。よくよく考えて見ますのに、兄貴一家は信心一つで立派にやっているのしか見えないのに、一体自分の昨今の状態はどうしたことであらうか。このまま兄と同居して居れば、兄の活動の邪魔になるばかり、じゃから自分達は一層何処かへ移動して、一生出来損いで終るほかはないと決心して、兄貴にすべてを打ち明けました。

ところが兄貴が申しますには、お前はそういうことで苦しんでいたのか。我々はな、信心が解つたというてはや

思わず頭がガクリと下りました。こうして現身の兄貴の親切心とおして如來の偉大な思召しを喜ぶようになった。

以上のことは先生の御法話を一度でもお聞きなされた方は必ずお聞きになつておられると思ひます。「我慢の強いことをこちらが気づかぬ、否本當に我慢が強いから、狂人が狂人と気づかぬように、そうと気づき得ない者を、向うが見抜いて、しかもそこが可哀相であると大悲を無限にそいで下さる方がまします」そのことひとつを、繰り返しまき返し、御身の上にかけてお知らせ頂いたのであります。

次に、「わたしが兄貴から聞きました中で二つの大切なことがあります。その一つは前にのべました通り『我慢のやまぬのが可哀相である』ということ。今一つはこの短冊に書いたことです」と前置きされて、次のように話して下さいました。

「何時も聞いて貰う通り、兄貴のお蔭でやつとお慈悲に気づき、また請われるままに法話なども始めました。ところが一つ困つた問題がおきた。私の講話を聞いて下さる外部の人達は、非常に喜んでくれるのですが、わたしの家庭の空気がメチャクチャになったのです。それは私がお慈悲に気づいてから、家内に聞け聞けとしきりにすすめたので

りそこない、解つたというてはまたやりそこなう。そういうやりそこないのやまぬ奴だから、そこを見てとつて、何処々々々でもお呆れないお慈悲である、と聞かせてくれました。そんなことではいかぬ、聞きなせとは云いませんでした。すると今度ばかりは何でも自分の考え通りに断行するとまで氣負ひこんでいた決心が、又候崩れて、青菜に塩で、へたへたととなり、大いに自分の非を知らせてもらいました。

出来そこないが話を聞いて解つたというて出来そこないでないようになるのではない。話を聞いて出来そこないがなれるほどなら、今日まで出来そこないで居るはずはない、どうにもなれぬ出来そこない者だから、そこを可哀相と思つて下さるのが仏の大悲というものです。元來、どこまでもお呆れないお慈悲がましますということが、こちらが徹底的な出来そこないの身であるからです。わたしはこれからさきも相変らずやりそこないのやまぬ奴なれども、やりそこないのやまぬところにお呆れないお慈悲がある。してみれば私の全体がお慈悲にすっかりおさめとられて出ようがない。そういう廣大無辺な仏のご真実に気がつかされた、このことは私にとつては有り難いことでしたな」

大略以上のことをお述べ下さって、しばらくは口を塞いで居りましたが、次に

「どうもお慈悲に気づいた人に、このような二つの大切な気づきがあるようです。兄貴なども二十九歳で気づいたのですが、それからドエライ元氣を出しまして、大学の卒業試験の頃などはねじ鉢巻で一升徳利を机の側にすえてやっています。一体どうなることであろうかと思っておりましたが、半年も経たぬうちに自然におさまって、平素の兄貴にかえりました、その当時、何か非常に感じたことがあったようでした」とつけ加えて下さいました。

私は今これらのお言葉を思い浮かべながら、福島政雄先生が仰言ったことと符合がぴったり一致しているのを知られました。それは「信にめざめることを百八十度の転換であると私はよく申してきましたが、それはどうでしょうか。信前はああもあった、こうもあった。信にめざめてからこうもなれた、ああもなれた、そういうことでよいのでしょうか。ほんとうのことは三百六十度の転換ではないでしやうか」とお聞きしました。三百六十度に転換しますとともに帰ってしまいます。私共の実際の生活振りを見ますと、信心があるなどと言えたものではありません。きれいさっぱり何にもない、そういうところに、ひとえに他力

ともしび

聚墨生

生死の苦海ほとりなし 久しく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ のせて必ずわたしける

(高僧和讃)

私には子が無いが、兄は二人の子持ちである。兄はよく「お前は淋しいだろう」と慰めてくれたが、その兄の長男が幼時の大病から精薄になっていて、あの子のことでなあと歎息しながら、死ぬにも死にきれぬと悩んでいた。「壁ひとえ子があつて泣き、無くて泣き」とよく聞くが、文字通りその通りだとうなずかされる。

これと同じく、智者には慢心の毒、愚者には愚痴の毒がつき、善人は金の鎖、悪人は鉄の鎖に縛られる。経に「宅有れば宅を憂い、宅無ければまた憂う」とあるが、煩惱具足の凡夫は、どっちに行ってもどうしようもない、始末のつかぬ身であるが、ここに私は生死の苦海ほとりなしと見抜かれて、救いの船を浮かべ、必ず生死の海を超えしめようとお誓い下さるのである。

仏陀は私共凡夫の能力の限界を知り尽くされて、どうしても無くってはならぬ、またそれさえあれば十分な救いの船を与えて下さるのである。この仏心ましまして人の世に光明が射しそめるのである。

四九年、十二月二十二日。

にして自力をはなれた、非行非善の念仏、願力自然の信味がひらけてくるのであります。

今この原稿を草しながら、瞑目いたしますれば温容は髣髴として眼前に映じ、德音は深く耳底にのこるのであります。七十一年の御生涯をつくして「狂乱の所為多き」おはたらきを続けて下さりながら、一冊の著書も出されずに、ひとすじに

「このやくざ者を、この出来損いの奴を、このやりそくないづめの私を、この我慢のやまぬ、誰からも見捨てられる者だから、それが可哀相と見て下さって、それを見捨てぬと仰せられる。この広大な御真実一つをいただくばかりでその他にはなんにもない、全くのからっぽですのや」

と懇切に、噛んでふくめるように、くりかえしまさかえしお導き下さったのであります。謹しんで二十三回忌の八月を迎え、耳の庭に残ります慈語を誌させて頂きました。

昭和五十年、八月中旬。 一道庵にて。



浄土宗の人は愚者になりて往生す

(末灯鈔 六)

夜空に輝く無数の星も、太陽があらわれるとその影が消されてしまふ。五々智慧を競い合う者も、ひとたび無量の仏智に照らされると、自ら愧じてその愚にかえらされる。

法然上人が愚痴、親鸞聖人が愚禿と名告られたのも、単なる謙遜の言葉ではない。然し信心の智慧が開けぬ間は、持ち前の智慧や智識にたよって、智愚を争う心がやまぬ。

法然上人の禪房で「親鸞の信心も恩師上人の信心も一つ」と何かの時語られると、信や勢観や念仏房が「もつての外」といきりまくった。そこで上人の前に出て、事の次第を申上げると「法然の信心も、親鸞の信心も如来よりたまわった信心だから一つ」とお答えになった。これというのも両聖共に手にもの持たずに、ひたすら本願のまことを頂いていられるのに、聖信は学問、勢観は持戒、念仏房は道心をたのんで、まるまる仏心のことを受けていない。

お慈悲一つで人生手放しのところに、師弟一味の浄土の信が開け、愚者としての往生の姿がある。

四九年、十一月九日。

あとがき



あります。信ずる者はたすけ、信じ得ない者は退げるとというのが世間一般の宗教であります。阿弥陀の大悲は世を超えていと感佩させられます。

高千穂豊乗帥(熊本)は、喉頭部の肉腫で大手術をうけられ、爾来声帯のない中にも九死に一生を得られた方で、本派本願寺で碩学でおられながら、学者らしい片鱗も出されず、一筋に仏法を身につけられての信味は身にしみますこととあります。不思議なことに、京都の西村様と熊本の堤様を介して御仏縁を頂きました。昔永観堂の律帥が非常にすぐれた方でありましたが、病弱なために学者とならず仏法者になれた、まことに、病もまた善知識なりと仰言ったことを思い併せられます。病は誰もいやな苦しいこととありますけれど、それが御縁になって仏心を仰ぎ、仏意を感佩する身となる時、病もまた善知識、という世界がひらけるのであります。

木村様は夏に強いと云って、金子帥を見舞われたり、滋賀県下に有縁の念仏の老婆様の慰問をせられた由であります。身体が許す限り、一期一会の旅を続けられることでしょう。

八月は原爆の月であり、敗戦の月であり、近角富音先生の二十三回忌、白井成允先生の三周忌の月でありました。まず最近刊行されました白井先生の青蓮華の歌集の中から二回にわたって抄出させて頂き、又富音先生の慈育をおもい、お聞かせ頂いた先生の御自督の耳の底にのこりましますを再録させて頂きました。

鳥辺野に昨日も今日も煙立つ
眺めて通る人は何時まで
という古歌がしきりに心に浮かぶ、この頃であります。

近角先生の真化仏土は、教行信証の化身土巻を中心に、信じ得ない者をしりぞけたまわずして、方便化土に迎えて、やがて景遂の願の御力で成仏せしめて下さる慈悲の限りないことをお説き下さったもので

御案内

- 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
- 市バス、新郊通り一丁目下車。
- 東入る三筋目左入る。
- 地下鉄、新瑞橋下車。
- 近鉄呼続下車。
- 又はもと笠寺下車、市バス乗りつき。
- 毎月二十四日、午前午后。
- 昭和区小椋町、教西寺法話会。
- 市バス、御器所通り下車、又は北山下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駄上町二ノ八八
電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 坂部 光雄
名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七